スペインに旅して

～ＯＭＥＰ世界大会の直前～

津守　真

四月八日から一週間、ＯＭＥＰ世界常任委員会が、スペイン、ソリア郊外のアルマルザで行われた。マドリードから更に二百五十キロ北東にバスで四時間ほど行った所にある。私は、今年の八月一日～四日に横浜で開かれる第二十一回ＯＭＥＰ世界大会の中間報告をするために、妻と一緒に出かけた。

バスが北に進むにつれ、岩山の丘陵がつづき、丘の中腹に教会の塔を中心に赤い屋根の村落が見える。北に行くにつれ、人家もまばらになる。その殆ど廃村に近い村で、マドリード市内の私立学校が、昔は城主の館だった石造りの三階建の家を修復して、子ども達が交代に毎年一週間を田舎で過ごすための寮にしている。学園長のホセフィーナ・ウントウルベ女史が、今回のＯＭＥＰ世界常任委員会の会場にここを提供されたのである。何百

年も昔の家具調度がそのまま使われており、門を一歩入っただけで、中世に生きているような気になる。ここでの客の接待の仕方も極めて古典的で、毎回の食事には、正式のウェイトレスが二人、姿勢を正して無言で給仕するという具合で、最高のもてなしをしようとされる主人の心意気を感じさせられた。子ども達もここで昔ながらの文化の中の生活を学ぶのであろう。反面、ボートやサイクリング用の自転車が沢山用意されていて、現代の都会の子ども達にとっては貴重な体験の場になっていることが察せられた。

マドリード空港で、集まってくる人達を待ちながら、私は久しぶりに会った世界常任委員の人達と話していたとき、英国の人が娘の家族の写真を見せてくれた。若い両親と三人の可愛い子ども達が肩を組んで写っている。一人の子どもは前の夫の子ども、一人は夫の前の妻の子ども、他の一人は自分達の子どもだと説明してくれた。私がその意味をすぐには理解しかねていると、隣に座ったノールウェーの人が、これが今のヨーロッパの典型的な家族だと説明してくれた。私は、日本ではこれほどまでに離婚が一般的だろうかという疑問とともに、祖母が息子娘達のこういう家族関係を人の前であからさまに話すことに驚いた。また、片親が違う子ども達がはばかる事なく始終一緒に集まる開放的な関係にあることをあらためて知った。私達の世代の者には受け入れがたく感じるが、これが現実なのだから受け入れるよりほかないだろうとその人は話された。いつものことながら、私は外国に出かけるたびに思いがけないことに出会って、自分にはそうはできないと思いながら、普段の常識をもう一度考え直させられる。

ＯＭＥＰ世界大会は、開催国の責任で行われるが、三年に一度開かれ、世界常任委員会と連絡しながら準備することになっている。創設以来の精神を引き継ぐこともまた重要な課題である。ＯＭＥＰは、子どもの生活の充実のために働く保育実践者の集まりであること、国境を越え、政治信条、宗教の別を超えて協力する場であること、子どもの仕事を通じて世界の平和に寄与することなどである。

世界常任委員会で、私は最初に、阪神大震災のために募金が予期したようには進捗せず、一時は、休憩時間のコーヒーも出せないかと思ったと話すと、コーヒーはなくてよい、お湯があればよい、世界の保育者が一堂に集まることに意義があるのだからと、皆が一斉に声をあげたのには驚いた。幸いに、コーヒーを提供して下さる会社があり、コーヒーブレークも通常のようにすることができるが、世界ＯＭＥＰの幹部の人達は、日本での世界大会を成功させようと一生懸命である。その中でも、こういうことはＯＭＥＰの精神にはそぐわないから譲歩すべきでないというような意見が挿しはさまれて、私は襟を正してもう一度考え直したことも何度かあった。随分遠慮なく皆が意見を述べるが、その終わりにはかならず、決めるのはあなたと日本委員会なのだからと付け加えられる。

世界各地域で活躍している人を幅広く知っているのは、世界ＯＭＥＰの人達なので、シンポジウムのスピーカーもその人達の力をかりて企画し、人選してもらっている。夜のコーヒーの時間は、そんなことについて自由に話し、意見の交換をするのに最適である。スペインでは、二時頃に昼食を終わると、四時半頃まで昼寝の時間（シエスタ）をとる習

慣がある。会議でも同様で、夕方の六時半頃から小さな見学や旅行があって、夕食は八時半、ときには九時である。夜のコーヒーの時間は、最初の二日ほどは活発だったが、週の後半には私どももヨーロッパの他の地域の人達も常とは違うこの生活時間帯に疲れてしまった。世界大会にはスペイン語圏からかなりの数の人達が日本に来るのを楽しみにして来られる。スペインの人は、私ども日本人と同様に、英語が拙い人が多いが、他人に対する興味がつよく、何とかして心を通じさせようと一生懸命になる人が多い。言葉でコミュニケーションできなくとも、子どもの仕事をしている人は、表情や身体表現を通して互いに理解しあえる共通性があることを信じてよい。

今度、日本の世界大会に集まる人達は、アジア、アフリカ、南北アメリカ、ヨーロッパと世界各地にわたっているが、多くが日本に初めて来る人達である。

いま、世界大会の準備も最終段階に達して、世界各地から―ロシア、東欧、ネパール、ベトナム、中国、マダガスカル、などなど多様である―、財政援助の要請、廉価なホテルの斡旋、ビザのための公式文書請求などの問い合わせが毎日のように来ている。円高の日本に来るのに、それぞれに苦労しながら、何とかして日本の世界大会に来ようとしている。その人達が、日本に来て良い体験をして帰ってほしい。どこの国でも、経済的に貧しくとも、住宅は広くて生活にゆとりがある。数日とはいえ、日本の安いホテルの生活がどういう体験になるだろうかということまで心配してしまう。

私どもがスペインにいるとき、テレビではオウムのニュースが報じられていた。マスコミの力は大きいが、新聞のニュースがすべてではなく、どこの国にも子どものために一生懸命になって日々の仕事をしている人達がいることを、直接に知ってもらいたい。また、私どもも外国のことを、新聞のニュースからはなれて、直接に話を聞くことによって認識し直したい。

スペインのＯＭＥＰ世界常任委員会で、ひとつ嬉しかったことがある。それは世界大会の開催国で幼児教育に貢献した人を名誉会員に推挙することがならわしになっており、日本の荘司雅子先生がそれに選ばれたことである。先生が常に平和教育を主唱されていたことは世界の人達にも記憶されており、今回の推挙となったものと思う。荘司先生は日本保育学会の大長老であり、ＯＭＥＰ日本委員会会長をつとめられ、現在は日本委員会名誉会長で、いまなお幼児保育のために著作活動をなされていることは日本の人々にはよく知られたことである。世界大会の四日目に行われる総会の席でＯＭＥＰ名誉会員への推挙がアナウンスされる。

それから、スペインに行く直前に、この二月に亡くなられた故神沢良輔先生のご遺族から、先生が生前心にかけておられたＯＭＥＰ世界大会に、記念として多額のご寄付を頂いた。私は長年にわたり、先生とはご親交を頂いていたので、世界大会を待たずに先生が亡くなられたことを残念に思うと共に、このことを有り難く思った。

スペインでの一日、バスで近くのプエブロ（村）を通ったとき、古い教会の塔の上に、コウノトリが大きな巣を作っているのを見た。鶴のように足の長い大きな鳥が出入りしていた。昔からヨーロッパではコウノトリが赤ん坊を窓から運んで来るという言い伝えがある。子ども達はそう信じているという。教会の前の小さな居酒屋のテーブルに腰をおろしてそれを目の前に眺めながら、もうじき始まる世界大会のことを思った。

（愛育養護学校）

※七月号（P.45）で報告しました基調講演者、パウロ・フレイレ氏は、都合により来日できなくなりました。